
メガネの魔法 5 ～恋の嵐にご注意を～

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネの魔法 5 〜恋の嵐にご注意を〜

【Nコード】

N6268P

【作者名】

シマ

【あらすじ】

彼氏いない歴〃年齢の私、遠藤裕美は会社の上司山崎匠さんと、恋人としてお付き合いを始めました。会社に来た取引先の相手は、裕美の同級生で彼女を振った相手……「メガネの魔法」その5 恋人編

「あれ……遠藤？」

「ええ！？佐々木君、どうして……」

私、遠藤裕美は工作中、取引先のお客様にお茶を出したら、その客の中に同級生がいた。その同級生は、高校生の時、私を振った男の人。何時もと違う雰囲気を感じ取ったのか、背後から恋人兼上司の山崎匠さんの鋭い視線を感じたけれど、今は仕事中。冷や汗を隠して、笑顔を作った。

「久しぶり。お前に会えるなら営業への転属も悪くないな」

「相変わらず人をからって……それでは、失礼致します」

会議室にいた全員にお茶を出し終えると、さっさと逃げる事にしたが……匠さん……目が怖いです。はぁ……後は、会議が終わるまで机から離れなければ大丈夫だよな？

「遠藤ちゃん、お茶は？」

「今、出したから大丈夫ですよ……でも、この時間だと会議がお昼にかかりそうですね」

「そうね……部屋を空にするとまずかな？」

先輩社員と二人で時計と睨めっこしながら考えた。誰かが残ると

は言っても、お弁当を買わなくても良い人は……私だけだ……

「私、お弁当ですから、デスクで食べますよ」

「遠藤ちゃんは、それで良いの？」

申し訳なさそうな先輩に、苦笑いで承諾した。どうせ匠さんと一緒に食べれないし、デスクで一人でも変わらない。もしかしたら、早く終わって一緒に食べれるかも！そんな期待は最悪な形で返ってきた。

「遠藤、今一人？」

「うわ！……佐々木君、会議は終わったの？」

「うん？ちよつと昼食休憩になってさ……なあ、今からでも俺と付き合う気ない？」

「馬鹿な冗談言っていないで、ご飯食べないと時間なくなるよ」

昔から本気か、冗談か分からない事を言う人だけど、今回はたちが悪い。休憩ならお茶のお代わりがいるかもなあ……匠さんに確認して来ようと、立ち上がった私の腕を掴んだ佐々木君の目は怖かった。

「待てよ。付き合ってやるって言ってんだ。少しは喜んだらどうだよ」

……なんだ？この俺様発言。卒業後に何があったか知らないが、かなり偉そうな発言に私の堪忍袋は切れる寸前になった。

「ここは、職場でそんな下らない話をする場所じゃないわ。手を放して」

「なんだと!!」

「今すぐ手を放せ」

私が言い返すと思っていなかったのか怒りで顔が赤くなった彼が、空いていた手を振り上げた。

その動きを止めたのは、鋭い視線を向ける匠さんの声。大股に歩いて隣に来た匠さんは、佐々木君の腕を引き離して自分の胸の中に入れてくれた。

「大丈夫か？」

「はい」

心配そうな匠さんの顔を見て、ホッとしている自分がいた。匠さんが来たからもう大丈夫。

「勘違いしないで下さいよ。誘ってきたのは、その子の方ですよ」

安心した私に追い討ちをかける佐々木君の言葉。私は、なんて最低な男に告白なんてしたんだろう。振られて良かったと、初めて思った。

「私に殴られたく無いのなら、今すぐ立ち去れ」

「山崎課長？部下を信賴してるのでしょうが、その女は変人ですよ」

今……私を変人と……言った？

ぶちっ

私の堪忍袋が切れた。俯いた私を心配した匠さんが、顔を覗き込んできたけど……今は目の前のクソツタレだ。匠さんから離れると、佐々木君の前に俯いたままで立った。

「佐々木君……」

私が名前を呼べば、侮蔑の眼差しを向けてきた。顔を上げた私は、ニツコリ笑った後、佐々木君のお腹に向かって拳を思い切り突き出した。

「ぐふっ！！」

「ザマミロ！人を馬鹿にするのもいい加減にしなさい」

腰に手をあてて踞る佐々木君を見下ろしていたら、後ろから聞こえた声に冷静さを取り戻した。

「……今、何をした？」

匠さんの目が点になっている。あはは……匠さん、黙っててごめんなさい。

「私、健康作りも兼ねてボクシングジムに通ってるんです」

「……なるほど、いいボディーブローだ」

匠さん、笑いが堪えきれてません。肩が震えてますよ……はあ……もう、今さらこの人の前では嘘も遠慮も、無駄な話した。隠す必要もないから良いけどね。

「匠さんも、一緒に行きますか？」

「課長に対して、何だその言い方は！やっぱり変人の馬鹿じゃ無いか」

その一言で今度は、匠さんが切れた。まずい！！目が据わってる。匠さん、落ち着いて！！えっと……あっ！そうだ！

「匠さん、お昼食べましょう！今日のお弁当は、匠さんの好きな物入ってますよ！！だから……ね？」

「……そうか、なら食べないと損だな」

「ぜひ食べて下さい」

良かった〜落ち着いて……ない？その目は怖いです。何で今、抱き締めるんですか？

何で今……キスするんですか！！！！！！

普段より深く激しいキスに翻弄された私は、ぐったりと匠さんの

胸に凭れかかった。

「私の大事な恋人を馬鹿にするのは止めて頂きたい」

「へ？恋人」

鳩が豆鉄砲くらったらこんな顔をするのかな？物凄く間抜け面だ

「今後の発言次第では、御社との取引も考え直さないといけませんね」

佐々木君の顔が青ざめ慌てて頭を下げると、逃げる様に……と言
うか匠さんに恐れをなして逃げた。二人だけになったオフィスで、
私はまだ匠さんの腕の中にいる。

「あの……」

「うん？」

「そろそろ放して下さいよ」

「おや？恋人に対して冷たくないか？」

匠さんが、ちょっと意地悪な笑顔になり、私は自分の身の危険を
感じて再び冷や汗が出た。この顔はやバイです。

「……ここは会社ですよ」

「仕方ないな……帰りは、真っ直ぐ俺の家に行くなら放すけど？」

「家ですか？」

何故、わざわざ家に？話をするだけなら、今日は外食の予定だしその時でも良いはず……首を傾げた私に、物凄く怖いぐらい綺麗な笑顔で匠さんが爆弾を落としてくれた。

「あんな馬鹿が、また現れるといけないし……そろそろ、次のステップに進みたいな」

……何ですか？次のステップって……意味不明なんですが？

「分からない？」

固まったままの私の顔を覗き込む匠さんが……物凄く怖い

「君を食べても良い？」

「な！？……えええ！？」

そう言う意味！？分かったけど……え？今日ですか！？しかも、ニコニコ満面の笑みで、脅さないで下さい！

「返事は？」

「……う……でも、経験ないです」

「返事はどうしたのかな？」

もう、人が慌てて焦っているのを明らかに楽しんでるし！！大体、

断る分けないってわかってる癖に！！

「くう……責任取って下さいよ」

「喜んで」

わざと睨みながら言うと、もう一度、キスをしてやっと解放された。私は、嬉しそうに笑う彼を見て、夜が来るのが怖かった。

その夜、匠さんの家で嵐の様な一晚を過ごした私は、次の日の朝、怨みを込めて彼を睨んでいた。

「もう少し、手加減して下さい」

「それは、ちょっと……いや、かなり無理だ」

「匠さんのスケベ！！」

恋の嵐は、まだまだ続く？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6268p/>

メガネの魔法 5 ～ 恋の嵐にご注意を～

2010年12月25日15時27分発行